

はっきりとは分かりませんが、三つ編みだけが、やけにはっきりしています。自分が小学四年生のひ弱だった少年に戻った気がして、胸の辺りがざわめきました。

けれども、こんな気持ちになったことは、忙しい毎日に紛れ込んで、そのうちすっかり忘れてしまっていたのです。

2

方。ドングリの実も落ち、木々の葉が色を変え始めた秋の夕方。

学校の先生から電話がありました。国語の時間に、奈緒が男の子に突き飛ばされて、泣いてしまったというのです。怪我がなかったのは幸いでした。電話を受けた新一は、最初はただびっくりしただけでしたが、徐々に男の子への怒りが募ってきました。

奈緒が何か悪いことをしたのなら、仕方のないことだと受け流しませんが、先生の話だと、奈緒はただ静かに授業を受けて、教科書を見ていただけなのです。それなのに、いきなり突き飛ばされたなんて。

先生は、「普段はおとなしい子なのだ」と、その男の子をかばっていましたが、そんなことは分かっていたものではありません。大人の前では猫を被る、知能犯的な少年かもしれないのです。そう考えたら、もう居ても立ってもいられ

ません。そんな乱暴者は、どうしたって許すわけにはいかないのです。

「今黙っていたら、もっとひどい目にあうぞ。ここは説教の一つでもして、バシッと行って聞かせてやろう」

新一はそう心を決めました。そして、  
「その男の子の家に行くてくる」

と、上着に手をかけました。すると、驚いたことに、奈緒が新一の腕をおさえて、ゴクンと喉を鳴らしたのです。思い詰めたような、何かを考えているような表情をしています。

「どうした？」

新一が聞くと、奈緒は、やっと聞き取れるくらいの声で「だめ。祐介くんは……」と、つぶやきました。もともと声の小さなおとなしい子ですが、このときの声は、本当に風がそよと吹くくらいの声でした。

新一はじつと奈緒を見つめました。奈緒はうつむいたまま、それ以上何も言おうとしません。言葉の続きを尋ねてみても、何も答えてくれないのです。新一の気持ちが、初めて揺れました。

奈緒に止められても、新一は父親として、その祐介とかいう少年に、ひとこと言いたい気持ちでいっぱいです。でも、父親がしゃしゃり出たことで、逆にもっといじめられたりしたら、それこそ取り返しがつきません。